

4. 首木・鞍・しりがせ・口籠

牛に犁や馬鋤を引かせる時の道具である。牛や犁が主役なら首木や鞍は脇役だが、これらが意外と大事な文化情報をもっていることが最近あきらかになってきた。

◆クビヒキが座ったら一人前

〈A〉は首木で長さ76cm。2つの穴にはもとは紐が通されていて牛の首にくくり付けた。標準名はクビキだが摂津市域ではクビヒキと呼んでいた。「首引き」の意味であろう。「クビヒキが座ったら一人前」といわれた。首木は売っているものを買ったが、ヤナギの根っこのところやセンダンの形のいいところで大工さんに作ってもらうこともあった。

◆極楽首木

〈B〉は極楽首木で長さ62cm。平野部の農村では首木を作るにもいい材料がない。そこで理想的なカーブに曲がった大・中・小の規格品が現れた。滋賀県甲賀郡土山の丸田興業製で「牛曰く極楽首木」と焼印がある。これを付ければ牛が「あー極楽、極楽」と喜ぶというユーモアである。野球のバットのような合板製で全国的に使われていた。

◆鞍・尻枷

〈C〉は牛の農耕鞍で左右幅43cm。摂津市域でもクラと呼んだ。鞍はもともと荷物や人（馬の場合に限るが）を載せるもので大きなものだが、この鞍は牽引用で大変小さい。そこでコグラ（小鞍）と呼ぶ地方もある。藁で編んだクラシタを付けてある。

〈E〉は尻枷で長さ67cm。首木と鞍から伸びた引綱を両端にくくり付け中点にカラスキを繫ぐ。標準名は「しりがせ」だが摂津市域ではシリガシ。一般にカシの木を使う。

◆クツゴ（口籠）

〈D〉は牛の口籠で口径23cm。鳥飼でも別府でもクツゴ。平安時代の『和名類聚抄』にはクツコ、16世紀にポルトガル人宣教師の編集した『日葡辞書』ではクツゴ。

『万葉集』では「籠（こ）もよ、み籠持ち……」と籠のことをコと呼んでおり、クチコがクツゴとなったようだ。つまりクツゴは奈良・平安時代語の名残。ここにも文化財があった。

何で口籠をつけたんですか？「麦や草喰てイノカン（動かない）」と返事がきた。

◆好奇心旺盛な雑種文化

首木の中程に紐を付けるのは朝鮮系技術の変化したもので、口籠は朝鮮半島でも使う。ところが鞍も使うのは日本独自で平安時代に開発されたもの、尻枷は中国系の技術である。

畿内は昔の首都圏、目新しいものには何でも飛びついて、「ええとこどり」で雑種文化を育てるのは奈良時代以来の伝統なのである。

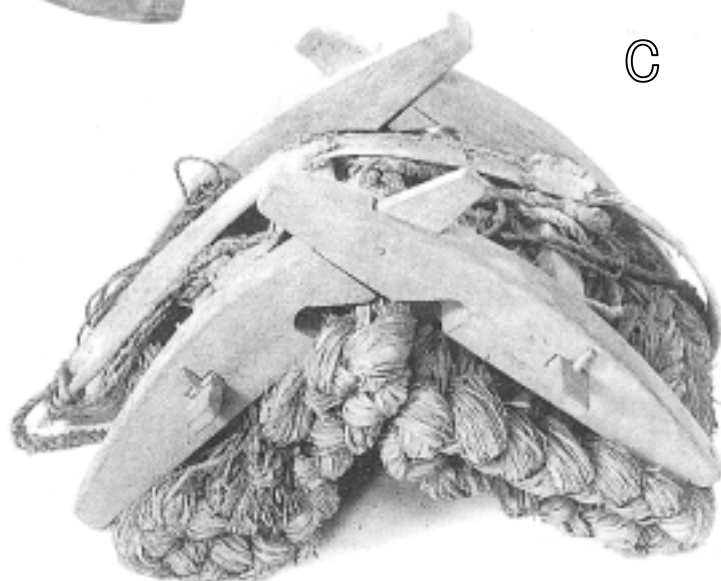
A



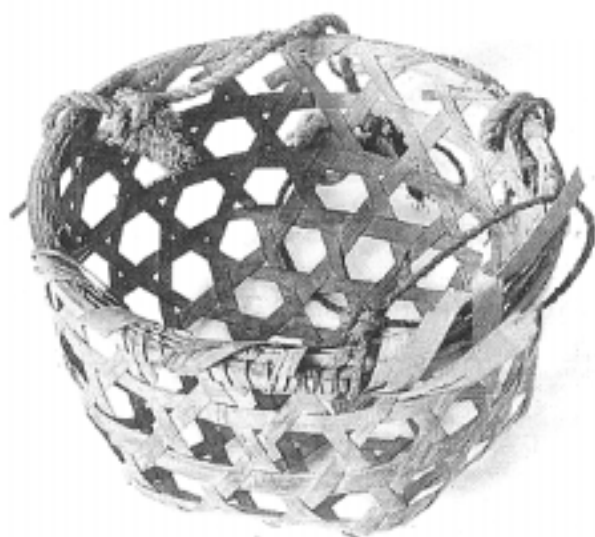
B



C



D



E

